

筆不精で照れ屋の貴方から、初めて手紙をもらったのは、私の二十二歳の誕生日でした。便箋二枚から貴方の思いがあふれてきて、私はその言葉たちをそつと心にしまいました。

「一緒に同じ道を歩いていこうな」

毎晩、枕元に置いてある手紙を何度も読み返しては抱きしめていました。遠く離れていても貴方の心はずっと変わらないと、私は信じ続けていました。

その手紙をもらうきっかけとなった、忘れもしないできごとがありました。一ヶ月に一回のデートで、行き先も言わずに車を走らせたときのことです。私が聞いても貴方は、「着くまで内緒」

と、ちゃめつけたつぶりに言うばかりでした。着いたのは、二ツ井町の社宅でした。

「親友に紹介したいんだ。お前のこと」

とびつきの笑顔で言い放ち、玄関を開けたのです。私は突然のことにポーツとした

がら、そのさわやかな親友の彼に挨拶しました。

料理が苦手だった私は焦りましたが、芋だらけのカレーと卵サラダを、貴方も彼もおいしいって言うてなんとか食べてくれました。次の朝、味噌汁で新婚気分を味わって、三人でドライブにくりだしました。青空は、二ツ井の町並を、紅葉とともにいっそう輝かせてくれました。きのうまでの緊張がとけ、窓越しの赤や黄色が、コンペイトウのようにキラキラと映って見えて、私は幸福感に包まれてウトウトしていました。

「素直でいい娘じゃないか。お似合いだよ」

親友に認められることが、第一の関門だったのです。私達の未来は、すぐそこまで近づいてきたはずでした。

私は、今、貴方の誕生日に破り捨ててしまった貴方からの手紙を、無性に読みたいのです。お互いに子供もいて幸せだけど、ときどき、心の宝箱を開けてのぞいている私を、夫は許してくれています。

貴方も宝箱をのぞいてくれますか？

*今でも想っていることを伝えたかったです。相手も私もそれぞれの幸せな生活を送っています。